

## あとがき―国家権力犯罪への反撃を目指して

映画「主戦場」を観ました。「歴史修正主義」と言われる人たちが、都合の悪い歴史を否定して、時に笑顔を交えながら堂々と語るアップの表情。これは異常です。「修正」とは「よくないところを直して正しくすること」（広辞苑）です。そうであるならば、彼等の言動は絶対に修正ではありません。むしろ「歴史捏造改竄主義」と言うべきではないでしょうか。

元文部事務次官・前川喜平さんの講演で、アメリカのホロコースト記念館に「14のファシズムの初期兆候」が掲示されていることを知りました。それは、政治学者のローレンス・ブリット氏が2003年に書いた文章がベースになっていて、ブリット氏はヒトラー（ドイツ）、ムソリーニ（イタリア）、フランコ（スペイン）、ピノチエト（チリ）ら「ファシスト」と呼ばれた指導者の政治を分析して、共通項をまとめたのだそうです。

その14項目とは、①力強く絶え間のない国家主義の宣伝②人権の軽視・蔑視③国民統合のための敵づくり④軍隊の最優先⑤女性差別のまん延⑥マスコミの統制⑦安全保障強化への異常な執着⑧宗教と政治の結託⑨大企業の保護⑩労働組合の弾圧と排除⑪知識層と学問に対する蔑視⑫警察による取り締まりと懲罰の強化⑬身びいきと汚職のまん延⑭詐欺的な選挙――です。

ほとんどが安倍政権に当てはまります。日本はすでにファシズムの段階に入っているということになります。異常が日常の隅々

にまで浸み込んでしまっているのが現実だと言えます。

安倍政権は、秘密保護法から共謀罪法までを強行成立させ、戦前の治安維持法、軍機保護法以上の弾圧体制を構築しました。それと並行して、集団的自衛権行使閣議決定から安保法制Ⅱ戦争法を成立させ、その最終段階として現憲法を「みつともない憲法だ」「押し付けられた憲法だ」と罵倒し、9条を骨抜きにしようと画策しています。国民にゆだねられた国家権力の暴走を抑える規範である憲法を公然と罵倒する政権が、改正しようと言い出す資格があるでしょうか。加えて、嘘・隠蔽・改竄政治を強行して恥じない政治姿勢です。さらに言えば、日本の憲法を踏みじり、日本の軍事占領を許している日米安保体制に対して、一言も改正を提起しない政権が改正する憲法の行きつく先は、対米従属の完全な固定化につながることは間違いないのです。

こうした異常事態にいかに向かうか、です。

「大逆事件」で幸徳秋水らが処刑された1911年1月24日の8日後、（旧制）第一高等学校で演説した徳富蘆花は、弾圧を恐れず政府を堂々と批判しました。

諸君、幸徳（傳次郎Ⅱ秋水）君らは時の政府に謀反人と見なされて殺された。諸君、謀反を恐れてはならぬ。謀反人を恐れてはならぬ。自ら謀反人となるを恐れてはならぬ。新しいものは常に謀反である。

「身を殺して魂を殺すあたわさる者を恐るるなかれ。」肉体

の死は何でもない。恐るべきは靈魂の死である。人が教えられたる信条のままに執着し、言わせらるるごとく言い、させらるるごとくふるまい、型から鑄出した人形のごとく形式的に生活の安を盗んで、一切の自立自信、自化自発を失う時、すなわちこれ靈魂の死である。

我らは生きねばならぬ。生きるために謀反しなければならぬ。

(ちくま近代評論選「謀反論」から)

\*

現憲法は、1947年5月3日に施行されました。当時の文部省は中学1年社会科の教科書として「あたらしい憲法のはなし」を発行しました。その最後にこう書いています。

憲法は、國の最高法規ですから、この憲法できめられてあることにあわないものは、法律でも、命令でも、なんでも、いっさい規則としての力がありません。これも憲法がはっきりきめています。

このように大事な憲法は、天皇陛下もこれをお守りになりますし、國務大臣も、國會の議員も、裁判官も、みなこれを守ってゆく義務があるのです。また、日本の國がほかの國ととりきめた約束(これを「條約」といいます)も、國と國とが交際してゆくについでできた規則(これを「國際法規」といいます)も、日本の國は、まごころから守ってゆくということを、憲法できめました。

「まごころから守っていく」——。何とも清々しい表現ではないでしょうか。今こそ、憲法の原点に立ち戻って、進むべき方向

を探り出す時だと考えます。

本会は、2013年1月に結成し、宮澤・レーン・スパイ冤罪事件の真相を広める活動を継続しています。真相を知れば知るほど、国家権力犯罪がいかに残酷であり、さらにその痕跡を徹底して闇に葬り去る悪辣さに恐怖すら感じます。同時にすでにファシズムの道に入り込んでいくという現実を何とかしなければならぬという思いに駆られます。

そんな現実と向き合うなかで、本冊子の発行を思い立ちました。宮澤・レーン・スパイ冤罪事件が国家権力犯罪である以上、多くの同種事件とともに、「国家権力犯罪に『時効』はない」との視点を再確認して、国家権力の悪辣さを告発し、謝罪させ、二度と繰り返させない世論と社会の確立を目指したいと考えます。

もとより本会に運動の中核を担う力量はありません。しかし、国家権力犯罪と闘っている諸団体・個人と連帯して、可能な行動に参加していく決意は持ち続けていきたいと考えます。

本冊子作成にあたっては、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件 総資料総目録」編集に続いて、全面的に協力していただいた大住広人さん、校正をお願いした林田英明さん、そして、資料問い合わせ等にご協力いただいたすべてのみなさまに心から感謝申し上げます。

(福島 清)